

『第10次南極越冬隊の記録』（2001年9月発行、支笏湖）

＝編集後記＝

南極観測に参加し、南極の大自然の中であのような生活と時間を皆さんと共有させてもらえたことは、私にとって何物にも代えがたく、その後の人生への影響や効果は計り知れないものがあつた。まさに「無形の財産」とさえ言える。勿論それは形こそ違え皆さんにもそれぞれ共通して言えることではないでしょうか。そんな訳で定年を意識し始めた数年前から、南極での足跡を「第10次南極越冬隊の記録」といった形にして、残しておくべき時期にきているのではないかと思うようになった。

そんな折、これ以上放置できないくらい黄色くボロボロになりかかった越冬中の「新聞のスクラップ」や、「家族だより」、「家族連絡」などが目にとまった。

幸いにも当時、出産・育児・共稼ぎと多忙だった我が家のカミさんがこまめに資料を収集・保管してくれていた。“これらを核に結晶させていけば何とかなるだろう”と見通しは立った。

そんな“思い”で編集を始めたら、隊長やドクターから手持ちの貴重なスクラップを提供し応援して頂いた。上京の際、極地研に足をのぼすと、寄稿文にあるとおりの「南極家族だより」の生みの親、長谷川慶子さんも大変喜んでくださり、図書の掘り出しもののスクラップや「家族だより」の欠けているもの、修復不能な頁などを提供して下さった。ミスターNHKその他の方々からも、なるほど…といった知恵を授けてもらった。

今でこそ衛星通信により、お茶の間への電話・FAXが当たり前になり、南極も時間・空間をまったく感じさせられることはなくなった。しかし、当時は「トンツー」による無線電報しか連絡手段がなく、電報発信資格証明書なるもので内地からの発信を規制していた時代だった。もっとも我が家のカミさんに言わせれば「便利すぎるのも良し悪しで、むしろ電報でせつなく、もどかしい思いをしたことも今は懐かしい思い出…」などと申しておりますが、他の奥様方はその辺いかがだったでしょうか？

そんな訳で昨年の山陰での総会までには完成させたいとそれなりに頑張ってはいましたが、結局今回に至ってしまいました。中には「早く仕上げんかい」、「未成品でも取り敢えずはこっちにも一冊何とかせい！」とせつつかれる一幕もあり、そんな皆さんの熱い想いに支えられて、何とか今回の支笏湖総会に間に合わせることができました。

この「第10次南極越冬隊の記録」が、単に29人の越冬隊員だけの「思い出」に留まらず、我が国の南極史の中で「探検から科学へ」の節目の時期に、また、「日本が日本らしかった時代」を、それぞれの家族が一体となって取り組んだドラマであり、健気で、一途に命を燃焼させていた若かりし日の“夫婦の、家族の原点”を思い出す“よすが”になれば幸いです。

最後になりましたが、発行にあたり写真・資料を快くお貸し下さった国立極地研究所、極地振興会、S10トピックス（NHK出版）にも、心からお礼を申し上げます。